

それからタバコをくわえて、マッチをすったり、どこかへ出て行ったりしました。ゴーシュはその粗末な箱みたいなセロをかかえて、壁の方へ向いて口をまげて、ぼろぼろ涙をこぼしましたが、気を取り直して自分だけたった一人、今やったところを始めから静かにもう一度ひきはじめました。そんなことの繰り返しでした。その晩遅くにゴーシュは、何か大きな黒いものをしょって、自分の家へ帰ってきました。家といってもそれは町はずれの川端にある壊れた水車小屋で、ゴーシュはそこにたった一人で住んでいて、午前は小屋のまわりの小さな畑でトマトの枝を切ったり、キャベツの虫を拾ったりして、昼過ぎになるといつも出て行っていたのです。ゴーシュが家へ入って灯りをつけると、さっきの黒い包みをあけました。それは何でもない、あのごつごつしたセロでした。ゴーシュはそれを床の上にそっと置くと、いきなり棚からコップをとってバケツの水をごくごく飲みました。それから頭をブルブルッとふって、椅子へかけるとまるでトラみたいな勢で昼間の譜面をひき始めました。譜面をめくりながらひいては考え、考えてはひき、一生懸命練習し、終わりまでいくと、また始めから何べんも何べんもごうごうひき続けました。夜中もとうに過ぎてしまい、もう自分がひいているのかもわからないようになって、顔もまっ赤になり、眼もまるで血走ってとても物すごい顔つきになり、今にも倒れるかと思うように見えました。その時です